

P-55

IgE介在性3相性皮膚反応を指標にした炙甘草と甘草の比較

○間嶋孝美¹⁾，手賀栄治²⁾，櫻井宏明²⁾，済木育夫²⁾，谿 忠人¹⁾
 富山医薬大和漢薬研・漢方薬学¹⁾，同・病態生化学²⁾

【目的】『傷寒論』の甘草には「炙」の指示があるが、日本では甘草が用いられている。甘草と加工調製した炙甘草の薬理作用の相違を、抗アレルギー作用を指標にして比較した。

【実験方法】1) 検体調製：炙甘草と炙る前の甘草の水煎エキスを調製し、さらにSephadexLH-20を用いて3分画[sugar分画，glycyrrhizin (GL) 分画，その他]に分けた。2) 評価法：BALB/c系雌性マウスを用いたIgE介在性3相性皮膚反応は既報¹⁾に従い、反応惹起後1時間(IPR)，24時間(LPR)，7日後(vLPR)に耳介の厚さを測定した。検体は、反応惹起2時間前と惹起後2から6日目まで連日経口投与した。陽性対照群としてprednisolone 21-acetateを反応惹起2時間前と惹起後4から6日目まで腹腔内に投与した。

【結果・考察】1) 検体の規格：両生薬の水煎エキスおよび3分画のHPLC-profile (UV:254 nm) およびGL含量に顕著な差異は認められなかった。2) 炙甘草と甘草の作用：炙甘草の抗アレルギー作用は3相すべてにおいて甘草よりも強い傾向にあり、ヒトの慢性アトピー性皮膚炎に相当する3相目(vLPR)を甘草より有意に強く抑制した。3) 分画の作用：炙甘草と甘草のsugar分画とGL分画において活性が見られ、両者のsugar分画の3相目(vLPR)を抑制する作用はGL分画と同程度であった。なお炙甘草のsugar分画の抑制作用は甘草より強い傾向が認められた。

甘草を炙ることにより、抗アレルギー活性が増すことが明らかになった。この病態モデルにおいて甘草およびGLの抗アレルギー作用はすでに報告されている。²⁾今回GLを含まないsugar分画にも活性のあることが判明した。今後はsugar分画中の活性成分と作用機序を解明するとともに加工調製する漢方医学的な意義を解明したい。

1) Tahara E., et al.: Allergol. Int., 48, 265, 1999.

2) Tatsumi T., et al.: Biol. Pharm. Bull., 24, 284, 2001.